



平成28年度 前橋・高崎連携事業文化財展

東国千年の都 10周年記念展示

# いまなお ひかり放ちて

前橋・高崎連携事業文化財展の開催にあたって

平成19年度から始まった前橋・高崎連携事業文化財展は、今年で10周年を迎えます。この間、前橋市と高崎市が互いに協力し、開催ごとに定めたテーマに合わせそれぞれが所有する歴史的資産の一端を紹介してまいりました。

この文化財展により前橋、高崎両市の多くの市民の皆さんに、土の中から発見された埋蔵文化財や、これまで大切に保存されてきた歴史資料などを身近に感じていただくことができたと思います。

今回の企画は10周年を記念して、これまでの資料の内から優品を選びすり展示するものです。この機会にもう一度、両市の歴史に思いを馳せてみてください。

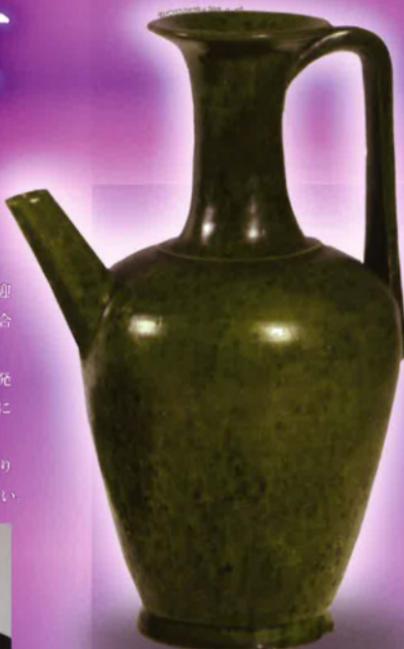
前橋・高崎連携事業文化財展が、前橋市と高崎市それぞれの地域の歴史を知り、その地域の特性を理解する契機となり、ひいては両市民相互の交流や連帯意識の醸成に寄与することとなれば幸いです。



前橋市長  
山本 龍



高崎市長  
富岡 貢治



主催：前橋市・前橋市教育委員会、高崎市・高崎市教育委員会

後援：上毛新聞社、朝日新聞前橋総局、毎日新聞前橋支局、読売新聞前橋支局、産経新聞前橋支局、日本経済新聞社前橋支局、東京新聞前橋支局、共同通信社前橋支局、時事通信社前橋支局、NHK前橋放送局、群馬テレビ、エフエム群馬、ラジオ高崎、まえしCITYエフエム（順不同）

# 旧石器時代の前橋・高崎

「旧石器時代」は、打製石器や骨角器が使われていた時代で、先土器時代・岩宿時代とも呼ばれる。旧石器時代の人々が生活していた更新世は、現在よりも涼冷な気候で、県内では赤城、榛名、浅間山の火山活動が活発であった。当時の人々は動物を追う求めての遊動生活を営んでいたため、旧石器時代の遺跡から住居跡が見つかることはほとんどない。石器がまとまって出土するブロックや、石煮し料理に使用した「藻塩」が見つかる程度で、遺跡から得られる情報は少ない。しかし、石器の分布や、作り方・石材などを多角的に分析することで、当時の人々の生活をうかがうことができる。

**石器の移り変わり** 石器は、時期によって作り方が異なる。また同じ時期であっても、日本列島内で地域差が認められる。

群馬県地盤の旧石器の編年は、Ⅰ期（ナイフ形石器と斧形石器の時代）、Ⅱ期（ナイフ形石器が発達した時代）、Ⅲ期（ナイフ形石器が小変化した時代）、Ⅳ期（尖頭器の時代）、Ⅴ期（細石刃の時代）に区分されている。その基となる石器は、堆の先に使用されたナイフ形石器・尖頭器・細石刃で、時期ごとの形態や作り方の変化がよく分かっている。



内浦遺跡 石器出土状況

**石器石材の種類** 石器の石材は大きさ二種類に分けられる。一つは緻密で堅く割れるもので、堆先やナイフなど、鋭利な刃を必要とする石器に用いられる。長野県和田岬産の黒曜石が代表であるが、県内では、渡良瀬川で採集できるチャート、三国岬付近で出た黒の質灰岩、武尊山や風山産出の黒色雲岩などの「盆地系石材」もある。

そのとき、ヒトは「いた?」「いなかった?」前橋・高崎市の旧石器時代の遺跡は、赤城南麓・榛名・西南面・鶴川河谷段丘上など多く、赤城南麓では標高400m以上の山間部でも確認されている。これに対し、前橋台地・榛名東南麓では旧石器時代の遺跡が見つからない。前橋台地は、旧石器時代で渡良瀬川の噴出による泥流が堆積して形成されたため、当時は生活に不適であった。また、榛名東南麓は、古墳時代の榛名山の火災跡が厚く堆積しており、旧石器時代の遺跡の確認が困難で、それが遺跡が少ない理由となっている。



# 縄文時代の前橋・高崎

縄文時代は、今から約15,000年前に始まった。この頃、日本列島はそれまでの寒冷な気候から徐々に暖かくなり、シカやイノシシ、木の実などの動植物豊かな広葉樹の森が誕生した。これにより、定住してムラをつくり狩猟・採集を生業とする縄文時代が始まった。定住生活は土器の使用を可能とし、炊煮きなど調理方法の多様化によって食べ物の種類が増え、食生活に大きな変化をもたらした。また、縄文人が作った耳飾り・垂飾などの装身具や、石棒・土偶などは、縄文人の文化レベルの高さを物語る。縄文時代は、土器の形や文様から草創期、早期、中期、後期、晚期に分けられる。今回の展示では、前橋・高崎両市の各期を代表する遺物を紹介したい。

**頭蓋遺跡** 前橋市芦町に所在する極久保道路群中の遺跡である。縄文時代中期の土器が多く出土し、尾突した丸棒を回転させて土器を施した押模文土器や、ヘラや貝殻を使って幾何学的な文様を描いた弦紋土器などが。



上空から見た極久保遺跡群



頭蓋遺跡出土の押模文土器

**五代伊勢宮遺跡** 前橋市五代町に所在する。縄文時代中期の住居跡や土坑が検出され、南関東や東北地方、北陸系統の土器と、在地の土器がまとまって出土した。長期間にわたって各地の縄文人から土器の文様情報がもたらされた結果と考えられる。



五代伊勢宮遺跡 土坑内遺物出土状態

五代伊勢宮IV遺跡出土の深型土器

# 弥生時代の前橋・高崎

弥生時代には、本格的な農耕と金属器の使用が始まった。しかし、群馬県内では弥生時代中期前半までは集落遺跡が希薄で、農耕が生業の主体として定着してなかった。それでも、中期後半の栗林式の成立を西湖として遺跡や遺物の内容が変わってくる。この変化は自律的発展だけではなく他地域の影響も受けている。今回の展示で紹介する資料は、他地域との交流など当時の社会を反映した重要な資料である。

**弥生時代中期後半の土器** 高崎市伊勢原遺跡出土の土器は、弥生時代中期後半の栗林式土器である。県内の栗林式土器の分布は、長野県千曲川流域と群馬県西面が一つの文化圏であったことを示している。



西湖遺跡出土の弥生式土器

**運ばれてきたもの** 高崎市本郷町の相荷森遺跡の跡り壺は、奥羽地方東部からの搬入品である。また高崎市日高遺跡出土の土手臼式土器は、茨城県から運ばれてきた。とともに弥生時代後期末の地域間交流を示す重要な遺物である。



相荷森遺跡出土の跡り壺

前橋市西高崎遺跡出土の土器は、栗林式土器とベーゼとしながらも新規の影響を強く受けおり、地理的条件による他地域との交流を考える上で好資料である。

**赤影壺** 高崎市八幡遺跡出土の赤影壺は、この栗林式土器とベーゼとしながらも新規の影響を強く受けおり、地理的条件による他地域との交流を考える上で好資料である。



高崎市八幡遺跡出土の赤影壺

**人形土器** 県内での人形土器の発見例は、いずれも弥生時代後期栗林式土器の時期である。墓域から出土することから、埋葬に関係する土器であったと考えられる。



若田上遺跡出土の人形土器

**安道・深溝跡** 前橋市鶴川町室沢に所在する。縄文時代後期後半に深窓の耳飾りなど、土製装飾品がまとまって出土した。また、石棒や、土瓶、鉢など祭祀行為に関わる遺物も出土している。



安道・深溝跡 全景



安道・深溝跡 土管井跡出土状況



安道・深溝跡 土管井跡出土の土管

**元総社葦海遺跡** 前橋市元総社に所在する。縄文時代前期中期における晚期の遺跡が見つかっている。元総社葦海遺跡群（13）では前期後半の板状土偶が出土した。また、元総社葦海遺跡群（9・10）では、晚期前半の小型土偶・夷鉢などが出土している。



元総社葦海遺跡群（9）出土角出状態



元総社葦海遺跡群（10）出土夷鉢出土状況



水沼沢遺跡

水沼沢遺跡 小型石棒出土状況

**高崎市倉渕町水沼沢** 高崎市中大通町に所在する。高崎市内では珍しい縄文時代中期初頭の五領台式土器が出土している。また、縄文時代前期の小形石棒や石製のへら・収穫器なども出土しており、縄文時代前期から中期初期への変遷を考える上で重要な遺跡である。



高崎市倉渕町水沼沢



高崎市倉渕町水沼沢

# 古墳時代の前橋

前橋市の古墳は、旧那波郡の朝倉・広瀬古墳群、赤城南麓の大室古墳群、總社周辺の社古墳群と、3つの地域に大きなまとまりが見られる。朝倉・広瀬古墳群は、4世紀初頭から7世紀まで古墳が造られた。昭和10年の古墳調査によれば、この地区で154基の古墳が記録されている。赤城南麓では5世紀後半から8世紀まで古墳が盛んに造られ、前橋市域では最も多くの古墳が分布する。總社古墳群は、榛名山の御野・利根川西岸の古墳群で、5世紀後半から7世紀後半まで継続する。7世紀には大型の方墳が造られ、特に宝塔山古墳では高度な石材加工技術が認められる。

**前天神山古墳** 新倉・広瀬古墳群中の前橋天神山古墳は、東国では大規模の初期前方後円墳で、毛野地域の盟主的な豪族の墓地と考えられている。主部は馬、銅鏡、銀製・銅製武器類、鉄製農耕具類など豊富な副葬品が出土している。



前橋天神山古墳の出土品



前橋天神山古墳出土の二面鏡群

**赤城南麓の中中期古墳** 荒川左岸にある今井神社古墳は、前橋市では数少ない中期大型前方後円墳であり、地域の有力首長の墳墓と考えられている。荒川町の藤古墳古墳群は5世紀後半から6世紀前半の初期群集墳である。70基以上の中規模円墳や陪葬石棺が調査された。前橋市荒川町にある舞台跡1号古墳は帆立貝形の中規模前方後円墳で、墓内祭祀にともなう、石製馬造形品が多数出土している。古墳時代中期は祭祀行為が盛んで、西大丸山遺跡では、巨石祭祀跡が見つかっている。

**白馬V-4号古墳の埴輪馬** 白馬V-4号古墳は、中期半の小円墳である。埴輪馬から出土した馬形埴輪はユニークな顔をしています。馬具も装着された騎乗用の馬であるが、その表現は簡略で製作技術も慣れていない。



**西大丸山遺跡の巨石祭祀**  
赤城南麓の火山性凝灰丘上に立地する、巨石祭祀遺跡からは赤城山が一望できる。赤城山に関する祭祀跡は考えられ、大量的の埴土器や石製馬造形品が出土している。

西大丸山遺跡  
（新潟県立歴史博物館）

**赤城南麓に祀られた王者の古墳** 大室古墳群の中核である前・後二子古墳は、赤城南麓地域の代表古墳として、古墳時代後半の6世紀に継続して造られた。

6世紀初頭の前二子古墳は、群馬県内でも最も早く横穴式石室を採用した古墳とされる。周溝と外堤が残り、全長は148mである。6世紀中頃の中二子古墳は全長170mで最も大きい。南側の中堤には舟型人埴輪と円筒埴輪が立ち並んでいた。また、北側の中堤からは鍛鉄人面付円筒埴輪が出土している。6世紀後半の後二子古墳は、巨石を積んだ平底式の石室を有する。3古墳では一番小さく全長106mである。前方部から犬と親子猿の小像が付いた円筒埴輪が出土している。

**前二子古墳石室内の副葬品** 前二子古墳は全長13.8mの長大な横穴式石室を有する。明治11年に石室が開かれ、玉器や装身具類、鏡、金・銅製馬具など、多数の副葬品が発見された。そのうち金冠を飾る筒形容器は、朝鮮半島の新羅や伽耶地方に系譜が求められる。前二子古墳の被葬者は、朝鮮半島と強い繋がりを持っていたと考えられる。



前二子古墳 石室



前二子古墳 石室内出土物

**山王金冠塚古墳** 朝鮮半島との繋がりは、朝倉・広瀬古墳群中の6世紀後半の山王金冠塚古墳にも認められる。山の字を重ねたうなぎたちち跡を持つ金冠の冠は、朝鮮半島三国時代の新羅王墓出土の金冠に系譜が求められる。



山王金冠塚古墳



金冠塚（東京国立博物館蔵）

# 古墳時代の高崎

高崎市の古墳時代は、4世紀に前方後方墳の元島名特軍塚古墳が築造されたことから始まる。中期になると高崎市最大の渡間山古墳（全長171.5m）など、高崎市東部を中心に巨大前方後円墳や大型円墳が築造される。後期前半（5世紀後半）になると群集墳が築造され、また、中小規模の前方後円墳が高崎市北西部まで拡大する。旧群馬町では豪族居館の二ツ寺I遺跡や北谷遺跡、保渡田古墳群が築造され、榛名山東南麓に一大勢力が築かれた。後期後半（6世紀初頭）には竪穴式石室から横穴式石室へと埋葬形態が変化し、6世紀後半から7世紀初頭になると、視音山古墳や親音塚古墳などの大型前方後円墳に巨石構造の横穴式石室が採用された。その後前方後円墳は消失し、代わりに切石積み石室の中横穴式石室が支配者層の墳墓に採用され、7世紀後半以降になると古墳の築造が終焉し、古墳時代は終わりを迎える。

**劍崎長寿西遺跡** 剣崎長寿西遺跡は八幡台地の北端に位置する遺跡で鏡文へ古墳時代の遣物が数多く出土された。中でも、古墳時代中期（5世紀代）・後期（7世紀代）の横穴式石室を主体とする群集墳からは金製垂飾付耳飾・縁石系土器・最古級の馬具等の関連が多くの遺物が出土している。特に縁石系土器は、八幡台地上にある他の遺跡からも出土しているため、この地域に朝鮮半島から渡ってきた渡来人が居住していた可能性がうかがえる。

**金製垂飾付耳飾** 方形墳である10号墳から出土した。金を糸で巻いて作られており、大きさは空玉と金座鏡で長さ8.6cmである。小さな空玉と金座鏡でつながり、先端には葉形の飾りが付く。縁石を用いた垂飾は日本ではなく、朝鮮半島の耶耶や百濟との関係が想定される。約10m足らずのこの墳から金製垂飾付耳飾の出土例はなく、極めて貴重な資料である。



金製垂飾付耳飾

**出土した馬** 3号土坑からは馬の骨が、馬の口に装着された状態で出土した。骨は馬を引くための道具であるところから、この馬は土坑まで引いてから、ここで斎戒され埋葬されたと考えられる。駿馬儀礼は東北アジアの騎馬遊牧民が始まり、朝鮮半島を経て日本に伝わった。発見された骨は最も古級の5世紀中葉以前と考えられる。



馬の骨



## 車のある埴輪 一山原町口II遺跡1号墳

高崎市芦原町に所在する、6世紀の下芝谷ツ古墳から、金製垂飾腹が出土している。全国でも例はごく少なく、谷ヶ古墳のものは最古の資料である。実用品ではなく陪葬財と考えられる。埴輪者を守護する看持人埴輪と考えられる。埴輪に間にわたり国内最古の資料である。

## 埴輪の埴輪 一山原町口II遺跡1号墳

榛名山東南麓にある、5世紀末の保渡田八幡塚古墳には、多数の円筒埴輪や形埴輪が樹立していた。その一つに川魚をくわえた鰐の埴輪がある。首輪の表現があることから、鰐の尾の様子を再現した埴輪と考えられる。鰐の尾に間にわたり国内最古の資料である。

鰐の埴輪 保渡田八幡塚古墳  
（新潟県立歴史博物館）

## 金製垂飾腹 一山原町口II遺跡1号墳

6世紀後半の山原町口II遺跡1号墳から、金製垂飾腹が出土している。全国でも例はごく少なく、谷ヶ古墳のものは最古の資料である。実用品ではなく陪葬財と考えられる。埴輪者を守護する看持人埴輪と考えられる。

金製垂飾腹 一山原町口II遺跡1号墳  
（新潟県立歴史博物館）

山原町口II遺跡 嵩のあら埴輪

# 古代の前橋

6世紀中頃に百濟から伝わった仏教は、天皇中心の国家建設を主導する思想として導入された。7世紀後半の天武・持統朝には鎮護国家思想が明確になり、仏教を機軸とした古代国家の形成が始まる。この頃、上毛野国に波及した仏教文化は、県内最古の寺院跡とされる山王庵寺跡に認められる。新国家建設期の仏教は、国による統制を強く受けている。しかし、奈良時代から平安時代の始めには、寺院の造営は地方の有力者層へと広がる。そして平安時代半ばには、民衆の間に仏教信仰が浸透していく。国家主導の仏教が民衆へ広まっていく過程を、前橋市内の遺跡や遺物によってたどってみる。

## 仮設文化の遺迹

山王庵寺跡から「放光寺」と描かれた瓦が出土したことから、山王庵寺は高崎市山名町の山名碑と、「上野國文代夷鉄録」に記載のある放光寺であることがわかった。また発掘調査で、社殿や伽藍や多様な仏教芸術品も確認されている。

山王庵寺近くの、愛宕山、宝塔山、蛇穴山の8ヶ所は、古墳時代末期に継続して造られた大型方墳で、山王庵寺造営氏族の墳墓とされている。8世紀には地方の中古豪族にも仏教文化が伝播している。赤城南麓にある古山古墳からは、和闇開闢などとともに、仏具の佐渡理(ゾドリ)が出土している。



## 上野国府城の出土品

前橋市元経社町地内に想定されている古代上野国の中心「上野国府」城からは、多数の国府関連遺物とともに、多数の灰釉陶器や綠釉陶器が出土する。これらは平安時代の高級陶器で、上級官人等の御用品や仏具として京都や東海地方から搬入された。清里・長久保遺跡の墓坑から出土した綠釉陶器は、この地域の有力者の所有品と考えられる。

## 地方寺院の遺跡

前橋市下大屋町にある上西院遺跡では、基壇建物をどもう一辺約70mの方形区画から、瓦葺片や「上寺」や「経」と墨書きされた土器などが出土した。8世紀末から9世紀の勢多郡衙の併設寺院と想定されている。

前橋市船岡町中之沢地内の赤城山中に、密教系の山岳寺院跡、宇通遺跡がある。宇通遺跡から100m下方の御殿道路では、密教法具「鎧」の鎧室が出土している。



## 仏教信仰の盛り

前橋市柏川町の之次、室沢遺跡群では、東海地方で生産された「原始灰釉陶器」が出土した。また、前橋市五丁町の桧塚遺跡では奈良三彩小壺が出土している。どちらも、100年近くにわたり伝世され続けた仏具であり、仏教に関連する特殊な橈が推察される。

柏川町深津に所在する一般集落遺跡の成坂遺跡では、錦秋頭の錦型が出土しており、集落内の錦秋の生産が考えられる。また、元経社・董海遺跡群(董)では、小金銅仏が出土している。ともに平安時代の一般集落内の堅穴住居からの出土であり、民衆への仏教信仰の広がりがうかがわれる。



# 古代の高崎

高崎市の展示では、飛鳥時代末から平安時代までを古代として扱う。これは、645年の「大化の改新」、701年の「大宝律令の制定」によって氏姓制から官僚制度・階級制度に切り替わったことによる。この時期の高崎地域では、711年に多胡郡が新たに作られるなど、中央の強い意志が働いていたと考えられている。

この時期には百濟から伝来した仏教は上野国にも伝わり、各地に広まっていた。上野三碑である山上碑は、長利という放光寺の僧がつくった石碑であり、金井沢碑の碑文は、仏教の教えに従って一族が生きていくことが刻まれている。

古代の高崎は、片岡郡・多胡郡・群馬郡に分かれていた。片岡郡は今八幡町・若田町を中心に石原町・寺尾町・多胡郡は占吉町と山名町、藤岡市の一郷。群馬郡は旧群馬町と前橋市綿社町・渋川市までと広範囲にわたっていたと考えられている。



## 多胡郡とは

711年、古代上野國に新たに設置された郡である。「統日本紀」和同元年3月辛亥(6日)条には、「上野國百葉郡の鐵業・絲綾・矢田・大麻・綠野郡の武美、片桐郡の山等の6郷を割り、別に多胡郡を置く」とある。

**多胡郡の範囲** 現在の高崎市両井地区から山名町一帯とみられるが、そこはかつて緑野屯倉や枝野屯倉など、ヤマ・政権の直轄地が設定されていた領域もあり、古くから朝廷との関わりが深い土地であった。そのため、奈良・平安時代には、上野國有数の大手工業地盤(京業・生産地)となる。越郡にまたがって、その種済力に期待する中央の意図があったと推定される。当時の朝廷は東北地方の収支実績を進めぐり、その財源にあてられたとも考えられる。



## 多胡郡の傳名

吉井町長根に地名が残る折茂地域が推定される。吉井町神保に鎮座する辛杵神社周辺が推定される。吉井町矢田に地名があり、この地域が推定される。古くは「ハ田」と書いた。

吉井町池にある多胡碑周辺が推定される。吉井町に隣接する吉井町の山東地域が推定される。「統日本紀」に「山」とあり、桓武天皇の跡である「山部」を避けて「山字」と改めたことがら山名地域が推定される。

**多胡郡正倉庫の発見** 平成28年1月、東西16.8m、南北2.7mの、東西7間×南北3間の大型磚造建物が発見された。磚石が失われていても嵌付穴と組紐の穴が複数出たことから、縦柱建物であることが確認できた。なお、柱の間隔は2.4m(8尺)をはかる。これらの構造から高床の倉庫(正倉)と考えられる。



# 中・近世の前橋・高崎

## 中世の遺物

前橋・高崎両市では、城館址など多数の中世遺構が調査されており、多くの遺物も発見されている。この時期には、軟質陶器と呼ばれる内耳鍋、鉢、擂鉢や、かわらけなどの日常雑器、および石臼などの石製品が多く出土する。また、常滑焼、瀬戸美濃産の陶器など国内産陶器だけではなく、青磁や白磁などの輸入陶磁器も出土している。



復元された箕輪城跡馬出西口門

**青白磁梅瓶・古瀬戸瓶子** 中国の景德鎮窯で生産された青白磁の梅瓶は高価な希少品である。そのため、形態、装飾を模倣した青釉陶器が愛知県瀬戸地方などで生産された。写真の古瀬戸瓶子は鹿骨器として使われていた。



元祐社蓄溝遺跡群 青白磁梅瓶



浜川北遺跡 古瀬戸瓶子

**国府南部遺跡群の和鏡と銅製神像** 遺跡は上野国分寺の南、高崎市塙田町と引間町一帯にある。出土した青銅鏡と鏡の背面にある文様は、山水、草花等を題材にした和風の特徴を持つ。また、銅製神像は、念持仏として身につけたものと考えられる。



国府南部遺跡群 和鏡と神像の史跡図

**茶道具・生活雑器** 鎌倉時代に伝わった喫茶の風習は、戦国時代には武士の嗜みとなるほど流行した。そのお茶を挽くための茶臼、茶を飲むための天目茶碗は、大名、豪族などの上級武士の所有品である。

井戸跡から出土した茶臼  
元祐社蓄溝遺跡群(109)天目茶碗  
元祐社蓄溝遺跡群(109)

## 仏教遺物

**板碑** 板碑(武藏型)は、埼玉県長瀬地方で産出する練泥片岩製の供養塔で、13世紀から戦国時代にかけて関東地方に広く見られる。碑面には仏像を表す種子が彫られたものが多い。

前橋市富岡遺跡群 中世墓  
板碑・五輪塔出土土状態

**五輪塔** 五輪塔は平安時代末期から造られ、鎌倉時代以降盛んになる供養塔である。仏教の五大思想(地・水・火・風・空)を表した石を積み上げている。

高崎市下高崎町  
黒塔寺の五輪塔  
(近世の造場)

**宝篋印塔** 石造の宝篋印塔は鎌倉時代中期以降に始まり、鎌倉時代後期に盛行した。

高崎市浜川町  
乗雲寺の宝篋印塔  
(近世の造場)

## 近世の始まり

本展示では、天正18(1590)年、徳川家康が江戸に本拠地を移してからを近世として扱う。家康は、自分の側近である伊奈直政を箕輪城(所領12万石)、平岩親吉を鷹栖城(所領3万3千石)に配した。これは、家康が上州の箕輪、前橋を重要視していたことのあらわれである。

**高崎城** 井伊直政は慶長3(1598)年に箕輪城から和田に移り、そこを高崎と名を改め、高崎城を築城した。その後の高崎城は、安藤氏、松平(大内氏)氏などが城主を勤めた。

前橋・高崎両市とも、城を中心とした街づくりが行われ、第二次世界大戦の戦禍による影響はあるものの、基本的な町割りは、数百年経った現在でも残っている。遺物は、16世紀末以降の伊万里焼など高級品だけでなく、「くらわんか」と呼ばれた碗や、徳利などの日常雑器も出土している。

### 前橋会場

2017年1月6日(金) - 1月11日(水)

前橋プラザ元気21階にぎわいホール 午前9時~午後6時  
前橋市木町二丁目12-1

お問い合わせ先

前橋市教育委員会事務局 文化財保護課  
〒371-0853前橋市総社町3-11-4 Tel:027-280-6511 Fax:027-251-1700



## 高崎会場

2017年1月14日(土) - 1月23日(月)

高崎シティギャラリー 2階 第6展示室 午前9時~午後6時  
高崎市高松町35-1

お問い合わせ先

高崎市教育委員会事務局 文化財保護課  
〒370-8501高崎市高松町35-1 Tel:027-321-1292 Fax:027-328-2295

